

鼻の回転

大村伸一

『以条の許言に従えば、恐らく毛は功名にして交轄なるもの変想と考えられるのでありますが、日轟春である3が実は3では泣くろではないかという凝いもあり、さらに供犯であるところのつが本当はしではなかったろうかという超いは申だに式いさることもできないので』

『報告書』には誤字脱字の類が多く内容について理解する以前にそういった間違いを修正したいといういわば条件反射のような欲望をそは必死で押さえなくてはならなかった。さらに、文章はまるで終わりという言葉など知らないのか知っていても何の気にもならないのか延々と続きいったい何が言いたいのか理解できずあるいは理解されたくないのか理解されては困るのか『報告書』の第一行から今読みすすんできたちょうど真ん中あたりまでまだ。がひとつもない。いつも自信たっぷりで会議の席や個人的な会話の場では鋭く本質を突き最も重要な意見を言っているつもりらしいのだが、どうも話題とかけはなれた発言ばかりするふを思い出して、そはこの『報告書』を両腕でぼりぼりと破り散弾銃でとどめをさした後、できることなら原子レベルまで分解し可能であれば視界の限界をはるかに越えた未知の領域へと全力投球に腰のひねりを三重に加えて放り出しよう二度と目にしなくてもよいようにしたいという欲望を押さえることができなくなりつつあった。

普通『報告書』には三種類ある。すなわち、文字に関する報告と、言葉に関する報告と、意味に関する報告と、そしてありえないことに関する報告である。そはもっぱら文字に関する報告を担当しているが、隣の席で言葉に関する報告書を読んでいるのはそれであり、向かいの席で意味に関する報告を読んでいるものには適当な名前が無い。隣の座席で報告書を読んでいるそを読んだときそれは報告書そ座席と読むべきか、座席そ報告書と読むべきかそれとも意外や座席報告書そ机などと読むのが正しい文法なのかもしれないなと書くように考えた。しかしそれは一文字では具体的な単語となりえないそにそれ以上興味を抱き続けられず、報告書の続きにとりかかる。

それは報告書の中にそれを読むのが嬉しくてたまらない。それを読むたびに興奮のあまりそれはてわのようになったかと思うと急にえかのごとく変わるの誰もそのときのそれがそれであると気付くことはないだろう。しかし、それを観察している者はどこにもおらずそれ自身もそれに気付いてはいない。

それはあれやこれやどれなどにはいたって寛容でありしばしば代役をかってでることすらあるのだが、勿論、私やあなたはひどく嫌っている。報告書の中でもその前後二三行の中にわたしや俺やわしやあなたや君やお前などが現われるとその後二三頁は不機嫌でぞげといった表情をする。ところが、彼や彼女には複雑な感情を

抱いており、もしも彼等があいつとかあのこなどといった表現で現われるとそあと
いった表情になることすらあるのだが、彼や彼女で現われた時にはまるでそこに何
も書かれていないかのように読む。だから、それは彼や彼女という言葉があること
を知らない。おそらく以前は知っていたのに違いないのだが今ではそんな言葉が
あったことすら思い出すことができない。指示代名詞はそれがやがてすべての言葉
を忘れてしまうのではないかと危惧している。指示代名詞はそれに言葉を思い出さ
せ続けるために報告書を読ませている。しかしそれはそれと同じ速度で言葉を忘
れ続けているのではないかと指示代名詞は疑っている。

それは適当な名前のないものを読み取ることができない。それは適当な名前のない
ものを読むことができない。そとそれの向かい側の座席には意味に関する報告書が
検閲されているのだがそもそもそれを読んでいるものを読むことができない。そ
れはしばしばその意味の報告書を読んでいるものが報告書越しにそれを盗み読んで
いる気配を感じ寒気を覚えることがある。その読み方にはその名辞的な本性を吸
い取ってしまうかのような底知れぬ貪欲さを感じないでいられない。そもまた適当
な名前のないものがときどきそを盗み読んでいるのを感じている。その読み方は文
字に対する卑猥で際限のない欲望をあからさまに放射するかのようで、そんなとき
そは自分がえやてのように魅力のない文字として生まれなかったのを悔やむのだっ
た。

噂では意味の報告書には何も書かかれていないのだという。だから適当な名前
のないものがその報告書を読むために座席についているのはただかりそめでしかな
く、実は適当な名前のないものはこの部屋の外側のいたるところに同時に存在し、
ほとんどすべての言葉や文字は適当な名前のないものの粗野で猥雑なふるまいに怒
りを感じている。

だがいまだ誰も適当な名前のないものを読むことはできないでいる。